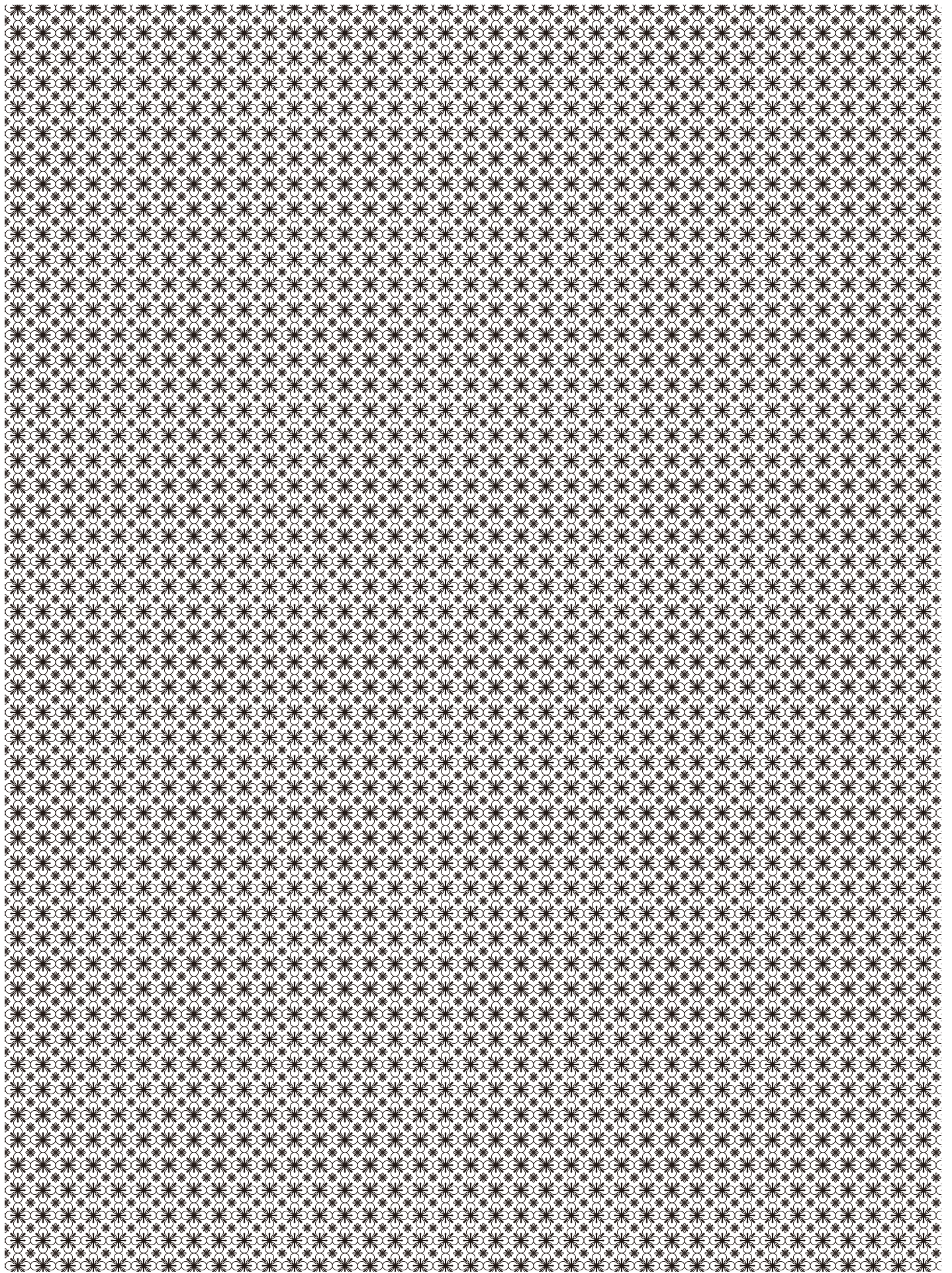


国語



〔問 1〕 例文の傍線部の意味として最も適当なものを、次の1～5のうちから一つ選んで記号で答えよ。

【例文】 試験はおしなべてよくできた。

- 1 一つにも増して
- 2 自然と
- 3 机上では
- 4 いつの間にか
- 5 総じて

〔問 2〕 次の熟語と同じような意味の言いまわしのものを、次の1～5のうちから一つ選んで記号で答えよ。

【言語道断】

- 1 秘すれば花
- 2 もつての外
- 3 言わずもがな
- 4 言い古す
- 5 言葉の綾

〔問 3〕 次のことばの意味として最も適当なものを、次の1～5のうちから一つ選んで記号で答えよ。

【ひいき 鬻^{ひいき}の引き倒し】

- 1 相手が困るようなことを、わざと行うこと。
- 2 こちらに悪気はないのにもかかわらず、相手に嫌われること。
- 3 力添えが過ぎるあまり、かえって相手に迷惑をかけること。
- 4 本来、褒めるべきところをけなしてしまうこと。
- 5 気に入った相手には、とことん尽くすこと。

〔問 4〕 次の語の意味として当てはまらないものを、次の1～5のうちから一つ選んで記号で答えよ。

【アフォリズム】

- 1 格言
- 2 寸言
- 3 警句
- 4 金言
- 5 伝承

〔問 5〕 敬語の使い方として適切ではないものを、次の1～5のうちから一つ選んで記号で答えよ。

- 1 先生から先方へお手紙をお書きしてください。
- 2 番号順にお呼びいたしますのでお待ちください。
- 3 八時に会場にうかがってもよろしいですか。
- 4 母が先生にご説明すると申しあげております。
- 5 先生が私にご遠慮なされることはありません。

〔問 題〕次の文章は宮本輝『螢川』の一節である。文章を読み、後の〔問 6〕～〔問 10〕に答えなさい。

目が醒めた瞬間から、竜夫は胸の中で、四月の大雪や、四月の大雪やと叫びつづけていた。四月に大雪が降ったら、その年こそ螢狩りに行こう。銀蔵とのあいだでそんな約束を交わしたのは、竜夫が小学校の四年生になった年であった。

「降るのよ螢が。見たことなかるう？ 螢の群れよ。群れつちゆうより塊つちゆうほうがええがや。いたち川のずつと上の、広い広い田圃ばかりのところから、まだずつと向こうの誰も人のおらんとところで螢が生まれよるがや。いたち川もそのへんに行くと、深いきれいな川なんじゃ。とにかく、ものすごい数の螢よ。大雪みたいに、右に左に螢が降るがや」

大仰な身振りで語る銀蔵にまわりついて、竜夫は何度も螢の話をしつづけたものである。

「なァん、地の者でも知らんことよ。あの螢の大群を見たやつはそうおらんがや」

「爺ちゃんは見たがや？」

若い竜夫の問いに、銀蔵は真顔で答えた。

「見た見た、見たぞお。一度だけなァ。おつとろしいぞ、あれはもうお化けとおんなじよォ。酔いも何も醒めてしもうたがや」

「連れて行けえ。竜夫を連れて行ってくれえ」

「なん、駄目じゃ駄目じゃ。滅多なことじゃあ見られんがや。四月に大雪が降るほど、冬の長い年でないと、螢のやつは狂い咲いてくれんちゃ」

「四月に降つたらええがけ」

「なァん、ただの雪じゃないがやぞ。大雪よォ、目エむくほどの大雪よォ」

竜夫が銀蔵から螢の話聞いてすでに五年がたっていたが、四月の大雪に出逢うことはなかった。それで朝食を済ますと、竜夫は慌てふためいて八人町にある銀蔵の仕事場へ走っていった。もうひと仕事終えた銀蔵は鉋の刃を研いでいた。ことし七十五歳になる建具師であった。

「大雪やが。爺ちゃん、四月に大雪が降つたがや」

「おう、えらい雪よのお……」

「ことしはどうじゃ。なあ、ことしは螢が出よるやろか？」

よいしょと立ちあがって、銀蔵は小さな開き戸をあけ、鉛色の空を睨んだ。吹き込む風が仕事場の木屑を舞い上げた。

「……まあ、出よるとしたら、ことしよのォ」

竜夫の首筋や頬が火照ってきた。彼は小学生のとき、もしそんな年が訪れたら一緒に螢狩りに行こうという約束を、英子とのあいだで交わっていたのだった。

開き戸から顔を突き出していつまでも雪を眺めている竜夫の肩を銀蔵が叩いた。

「早よう閉めんと、寒うなるがや」

振り返ると、短く刈り上げた銀蔵の白い頭髮がちょうど竜夫の目線にあった。いつのまにか竜夫は銀蔵よりも背が高くなっていた。正月に逢ったきりで、竜夫は長いあいだ、銀蔵の仕事場に遊びにくることがなかった。

「父ちゃんはどうね？」

と銀蔵が訊いた。

「良うも悪うもならん」

「できるだけ父ちゃんの傍におつてあげれ」

七輪で餅もちを焼きながら銀蔵は柔和な目を竜夫に注いだ。

「……うん」

「息子が二十歳はたちになるまでは、絶対に死なんちゆうのが重さんの口癖やったちゃ」

竜夫は確かに父を避けていた。老いて憔悴しょうすいした父が嫌いだったのである。七輪から弾はじけ散る炭の火花が、無数の螢となつて竜夫の前で飛んでいた。竜夫は餅を手で裏返ししながら、むりやり笑つた。

「なァん、父さん死なんちゃ」

「おうよ、死ぬもんか。息子が大きいなつて、それからしあわせになつてから死ぬがや」

大きいなるには、まだ途方もない長い時間がかかりそうに思えた。

「爺ちゃん、螢の大群が出ても出んでも、ことしは螢狩りに連れて行つてくれエ。なあ、一匹も出んでもええがや、きつと螢狩りに行こう」

「おうよ、きつと連れていくちゃ。竜つちゃんとの約束をええ加減に果たしとさんと、この銀蔵もいつくたばるかわからんがやちゃ」

銀蔵の仕事場を出ると、竜夫は八人町から西町のほうへ歩いていった。西町で市電に乗つて、病院に行くつもりであった。

雪を積み上げてゆるい傾斜を造り、その上を子供たちが滑り降りている。みんな一本の青竹を半分に割り、それで簡単なスキーの板を作る。小学生のころは竜夫も冬になるとそうして遊んだが、一度ひっくり返つて脳震盪のうしんどうを起こして以来やめてしまった。

商店街の手前で誰かの呼ぶ声が聞こえた。関根圭太であった。知らぬまに、関根の家の前を通つていたのである。二階の窓から顔を覗のぞかせて、関根は手を振つていた。

「どこ行くがや？」

「病院や」

「ちよつとあがつてかんか？」

関根の家は洋服の仕立て屋であつた。一日中ミシンの音が響いていて、竜夫は関根の家の二階にいるのはあまり好きでなかつた。度のきつい眼鏡をかけた父親も、笑いながら店の中から手招きをしていたので、竜夫は仕方なく入つていった。

「お父さんの具合、どうですっちゃ？」

と関根の父は問いかけてきた。いつも毛糸のチョッキを着て手ぬぐいで鉢巻はちまきをしめ、首からはメジャーを垂らしている。片方の耳が不自由なので、竜夫は大きな声を張りあげて父の容態を説明した。関根の父は頷うなづいて眼鏡をずりあげた。

「竜つちゃんも県立を受けるがけ？」

竜夫はまだ決めていなかった。高校に進めるかどうか危あやぶむ気持があつた。だが、もうわしをあてにするなという父の言葉は、逆に勉学への意欲をおおっていた。

圭太はえらい勉強しだしてのオと関根の父は笑つた。そして声を殺し、

「わしは知つとるがや。なん、あいつの勉強には邪心があるがや。いつのまにか色氣づいて、しょうのないやつやが……」

とおかしそうにささやいた。関根は二年前、母親を病気で亡なくして、いまは親一人子一人であった。竜夫も[※]千代と一緒に葬儀に参列したが、

出棺の際、突然、棺にとりすがって人目もはばからず泣き崩れた関根の父の小柄な姿は、いまもまざまざと覚えていた。

「わしは、あいつが中学を出たら、仕立ての修業をさせたいと思うとるがや。早よう一人前の職人になるには、そのほうがええちや」

一階から降りてきた関根が顎をしゃくって竜夫を招いた。竜夫は関根と一緒に狭い階段を昇った。

「父ちゃん、何言うとったがや」

「お前がえらい勉強しだしたって」

「父ちゃん、俺が高校に行くの反対ながや。なん、洋服の仕立てをするにも、これからは教養がいるがや。うちの父ちゃんは、教養がないがや」と下から、

「何が教養やが。お前の本心はちゃんとわかつとるがや」

と関根の父が叫んだ。圭太は慌てて障子を閉めた。

「なして、こういうことだけは聞こえるがやるか。片っぱの耳しか聞こえんくせに」

圭太の憤慨した顔が、竜夫はおかしかった。

「教養がないがや」

階下を指差すと、圭太は顔をしかめてまた言った。それで竜夫は畳の上に笑い転げた。

「何がそんなにおもしろいがや？」

無然とした面持ちで椅子に腰かけて、圭太はしばらく竜夫を見ていたが、ふと思いついたように机の引き出しをあげると、小さな箱を取り出した。

「誰にも言わんがやぜ」

中には一枚の写真が入っていた。圭太はそれを竜夫に渡した。英子が、桜の木の下で笑っていた。

「これ、どうしたかや？」

圭太は笑って答えなかったが、

「英子に貰うたがか？」

という竜夫の問いで、にやっと笑いながら頷いた。

「ほんとに英子がお前にくれたか？」

「ほんとよオ。これは英子が富山城で撮った写真やちや。ちよつと前、俺にくれたがや。俺の努力がやつと報われたちや」

「……ふうん」

竜夫はもう一度写真に眺め入った。それは実際の英子よりもつとおとなびて美しいように思えた。圭太は竜夫の手から写真を取ると、汚れるとつぶやきながら、また箱にしまった。

「嘘やちや。英子がお前に写真なんかくれるもんか」

「竜夫はむきになってそう言った。」

「お前、人の顔じつと見て何ちゆう失礼なこと言うがや。それは俺に対する侮辱やちや」

「……別に顔見て言うとするがでないがや」

「まあええちゃ。……それより竜っちゃん、英子はほんとにきれいじゃのオ。お前もそう思わんか」

「うん、……英子はきれいじゃ」

もし、お前も英子を好きかと訊かれたら、竜夫はそのとき素直に、ああ好きじゃと答えたに違いなかった。

もつとゆつくりしていかれと関根の父がひきとめたが、竜夫はそそくさと関根の家を辞した。市電に乗らずに、父のいる病院への長い雪道を歩いていった。この雪が融けたら春になって、自分は中学の三年生になって、一所懸命勉強をしなければいけないのだと思った。不思議な昂ぶりが竜夫の足を早めていた。

小降りになったり烈しく吹きつものたりしながら、雪はいっこうにやむ気配を見せなかった。道行く人はみな外套を白く染め、身を屈めて急いでいた。

竜夫は雪を蹴った。彼は生まれて初めて、この陰鬱に降りつづく雪を憎んでいた。雪煙が、強く吹いている風にあおられて竜夫の顔や胸にかかった。いたち川のはるか上流に降るといふ螢の大群が、絢爛たるおとぎ絵となって、その瞬間竜夫の中で膨れあがってきた。

※1 千代：竜夫の母親。

(宮本 輝『螢川』より)

〔問 6〕傍線部I「竜夫は胸の中で、四月の大雪や、四月の大雪やと叫びつづけていた」のはなぜか。最も適当なものを次の1～5のうちから一つ選んで記号で答えよ。

- 1 竜夫が小学校四年生の時に銀蔵と約束したことが、五年の歳月を経てようやく叶う時が来たと嬉しく思っていたから。
- 2 地元の人間でも見たことのない大雪が降るように舞う幻想的な螢の姿を、年老いた銀蔵と一緒に一度でも見に行こうと思いついたから。
- 3 螢と一緒に見に行くという、小学生のときの英子との約束を叶えることができるのではと期待したから。
- 4 銀蔵から今年は螢の大群が発生することが確認できたら、英子と二人だけで螢を見に行くことの口実にできると思ったから。
- 5 もし今年、奇跡的に螢の大群を見ることができたなら、父の病気も全快するのではないかと淡い期待が急に沸いてきたから。

〔問 7〕傍線部Ⅱ「……うん」と答えた竜夫の言葉からはどのような気持ちを読みとることができるか。最も適当なものを次の1～5のうちから一つ選んで記号で答えよ。

- 1 この先一緒にいられる時間も少なく、できるだけ傍にいたいとは思いますが、年を取り衰弱した父を避けたい気持ち。
- 2 銀蔵に言われるまでもなく、父の傍には居たいとは思っているが、高校入試を控えたこの時期に父のことはあまり考えたくないという気持ち。
- 3 急に病人の話になったことで、今まで楽しく愉快に思っていた螢狩りが急に空しくどうでもよいものようになってしまった気持ち。
- 4 螢狩りの話をしながらも、竜夫の心の中は父親のことばかり考えていることを銀蔵に悟られ少し戸惑っている気持ち。
- 5 螢狩りの楽しい話を台無しにしたことに怒りがわいてきたが、形だけにせよ父のことを心配してくれる銀蔵に無理やり笑って答えようとする気持ち。

〔問 8〕傍線部Ⅲ「俺が高校に行くの反対ながや」と圭太の父親が高校受験を「反対」していたのはなぜか。最も適当なものを次の1～5のうちから一つ選んで記号で答えよ。

- 1 中学を卒業したら、洋服仕立て屋の修業をさせ、早く腕の良い職人になって自分の跡を継いでほしいと思っていたから。
- 2 息子を高校に行かせてやるつもりでいたが、自分の反対を押し切って高校受験をするくらいに気持ちが悪ければと思っていたから。
- 3 教養の意味も分からない息子が高校に行けばどうにかなると思っていることから目を覚まさせたいと思っていたから。
- 4 圭太の高校受験は同級生の英子と同じ高校に行くためであって、教養を培おうという気持ちがないことが分かっていたから。
- 5 自分には教養がないことは分かっていたが、仕立て屋にはかえって教養があることが技術の邪魔になると信じていたから。

〔問 9〕傍線部Ⅳ「憤慨した顔」に近い意味を表すことばとして、最も適当なものを次の1～5のうちから一つ選んで記号で答えよ。

- 1 洪面
- 2 吠え面
- 3 赤ら面
- 4 したり顔
- 5 得たり顔

〔問 10〕傍線部V「竜夫はむきになってそう言った」のはなぜか。最も適当なものを次の1～5のうちから一つ選んで記号で答えよ。

- 1 圭太のことが、英子を巡るライバルであると気づくとともに、自分とは少しも話をしてくれない英子が圭太には写真まで渡していることに驚いたから。
- 2 何でも強引にことを進めていく圭太に呆れるとともに、皆の憧れである英子と圭太では全然つり合いが取れていないと思ったから。
- 3 自分のことばかり話す圭太に嫌気がさすとともに、病院に急がなくてはいけないのに無理やりに家に上がらされたことに苛立っていたから。
- 4 自分の思いに素直な圭太を羨ましいと感じるとともに、英子から写真を貰えたことに嫉妬し、認めたくなかったから。
- 5 引っ込み思案である自分に情けなさを感じるとともに、気になる英子が圭太との距離を縮めていることにどうしようもない怒りを感じたから。

〔問 題〕次の文章を読み、後の〔問 11〕～〔問 15〕に答えなさい。

「うまうま」とか「いやいや」とか、「おてて」とか、子供は母親から少しづつ言葉を教えられる。「お菓子をあげる」とか「お菓子をくださった」という言葉も耳にする。子供は「あげる」という言葉が敬意をこめた表現だとは、はじめのうちは気づかない。また、「お菓子をくださった」といえば、その相手は自分より上の人なのだと気づかないかもしれない。しかし、やがて子供は、「あげる」という言葉が、お餅を神棚にあげるとか、荷を舟から陸にあげるとかにも使われることが分ってくる。

「くださる」という言葉は、「くだす」と関係が深い。「くだす」とは、力あるもの、社会的な位置や、程度や価値の高いものを、力の弱い、価値の少ない、程度の悪いところへ、かまわず落下させることであり、上から下への力が強く、普通ではその力に抵抗できないことを指すと、子供はやがて分ってくる。「命令をくだす」「おなかをくだす」という表現も、その本来の意味によることだと分るようになる。そして、「おろす」は、意識的に、下につくまで注意を保って運ぶこと、従って「重荷をおろす」と使うこと。また、「おとす」は、高い所にあるはずの物を、手放して、それが下についた結果、どうなるかと構わないときに使う言葉だということも、次第に区別できるようになる。

人に物を与え、渡すことを敬意をこめて言うには、日本語では、物を上にあげ、下にくださる、という言葉を使う。それは日本人の社会の構造が、絶えず上下関係に深い注意を払う社会である結果である。子供はそれを、アゲル、クダサルという言葉とともに、知らず知らずのうちに理解する。子供は自分で言葉を作ること、稀にあるが、それよりも、すでに出来ていて、大人によって受けつがれて来た言葉の体系を教え込まれ、その言葉全体のワクの中に入れて、それが使いこなせるようにと仕向けられる。その結果、子供はその単語や文法のワクに従って、自然界や、人間の、あらゆる物事を区別し、判断するようになる。

この言葉のワクは、どの国でも同じというわけではない。例えば、日本語では、「子供がA」には「……」と「子供がB」には「……」とで、はつきり違う。「子供がA」には「……」という言葉から、人々は、母親が先生と話している場面を想像する。「子供がB」には「……」と母親が先生と話しているなら、その母親は言葉に対する心づかいが細かくないということになる。しかし、この「申す」と「言う」の相違にびったりあたる言い方を、英語・ドイツ語に求めても、それを引き出すことはできない。英語・ドイツ語には、日本語にあるこの区別が無く、「申す」も「言う」も一つの単語で表現する。それは、英語・ドイツ語の社会に「申す」と「言う」にあたる観念の区別がないからである。

もちろん、日本語の方がいつも言葉の数が多く、ヨーロッパ語の方がいつも少ないというのではない。ヨーロッパ語にあって、日本語に欠けている言葉もある。例えば、英語には、「自然」という言葉がある。ネイチュア nature がそれである。このネイチュアにあたる言葉は、日本語では「自然」という他、何も言いようがない。中国語やヨーロッパ語から借り入れたものではない、もともとの日本語をヤマト言葉と呼べば、ヤマト言葉に「自然」を求めても、それは見当らない。何故、ヤマト言葉に「自然」が発見できないのか。

それは、古代の日本人が、「自然」を人間に対立する一つの物として、対象として捉えていなかったからであろうと思う。自分に対立する一つの物として、意識のうちに確立していなかった「自然」が、一つの名前を持たずに終ったのは当然ではなからうか。「申す」と「言う」の観念の区別がない所では、その言葉の区別がない。「自然」が一つの対象として確立されなければ、そこにはその名前がない。

「自然」が「人間」に対立する一つの物として捉えられなかったのは、日本民族においては、深い遠い由来を持つ事柄である。だから、「自然」という中国語を学んだ後でも、長い間、日本人は「自然」を一つの物と見る考え方を身につけずに来た。それは、単に遠い歴史の時代だけでなく、

現代の日本人の間でも、根強いことのように見える。

ヨーロッパ人にとって、自然は、人間がそれに働きかけ、変革し、破壊し、人間に役立つものを作り出す素材である。山の形を変えて水のため、しっかりとした道路をつけて人間の往来に役立てる。自分の住んでいる地球を動かすにはどの位の力があるかを計算し、この地球から脱け出して、その回りをめぐらうと考える。その根本には、地球を自分に対立する一つの物と見る考えがはっきりと存在している。

この頃は、日本でもヨーロッパに倣^{なら}って、川の水をせき止めて湖を作り、港灣を埋め立てて、それを大いに利用しようとする風が起っている。それにもかかわらず、基本的には、日本人は自然を、人間に対立する物、利用すべき対象と見ていない。むしろ、自然は人間がそこに溶け込むところである。自分と自然との間に、はっきりした境が無く、人間はいつの間にか自然の中から出て来て、いつの間にか自然の中へ帰って行く。そういうもの、それが「自然」だと思っっているのではなからうか。

日本人は自然を徹底的に人間のために利用しようとするよりも、自分の生活の中に自然を持ち込んでこようとする。石で堂々とした家を建てるよりも、自然の木を使い、自然の土を使って家を建てる。建てた家の中に、小さい箱庭のような庭を作り、自然をそこに移し入れる。いつも自然と共にあること、これが日本人の自然に対する対し方である。自然と共にいるというよりも、「自然」と溶け合い、「自然」に対して自と他という、はっきりした区別を持たない。

若いうちには、いろいろな活動をした人でも、日本人は年をとると、山の麓^{かもと}の静かな所に小屋を建て、そこにひっそりと生きたいと願う人が少なくない。人々はそれを、よいことのように思う。「隠棲^{いんせい}する」という言葉がある。人間が、自然の風景——大きな林、水の流れ、広々とした草原、そこに立つ一本の大樹——その中に自分を持って行き、その自然の一つの風物となって生きること、それが隠棲である。それは日本人が「自然」と「人生」に対して持つ、根深いところさしの一つの姿であると言えるように思う。

これには、他のさまざまな原因もある。しかし私は、これを、言葉の問題に引きつけて考えている。日本語のヤマト言葉に「自然」という単語がないこと。日本人が自然を利用の対象と見ず、自然と人間との間を明瞭^{めいりょう}に分けずに、融^とけ合おうとすること。それら二千年前のあり方が、長い歴史の時代を通じて日本人の間に生きており、今日も依然として尾を引いて、そのような姿をとって現われるもののように私は見る。

(大野 晋『日本語の年輪』より)

〔問 11〕空欄A・Bに入るのにふさわしいことばの組み合わせとして、最も適当なものを次の1～5のうちから一つ選んで記号で答えよ。

- | | | | | |
|---|---|---------|---|--------|
| 1 | A | 申します | B | 言います |
| 2 | A | 言います | B | 申します |
| 3 | A | おつしやいます | B | 申します |
| 4 | A | おつしやいます | B | 言います |
| 5 | A | 申します | B | 申し上げます |

〔問 12〕 傍線部Ⅰ「それ」とはどのようなことを指すか。説明として最も適当なものを次の1～5のうちから一つ選んで記号で答えよ。

- 1 人間にとって「自然」が対立する一つの物であったということ。
- 2 日本人が長い間「自然」を物として捉えてこなかったこと。
- 3 日本人が「自然」を物として捉えないのは、歴史の問題ではないということ。
- 4 人間が「自然」を対立する物と捉えるのには深く遠い由来があるということ。
- 5 ヨーロッパ人にとっては、遠い過去の問題ではなく現代に通じる根深い問題であるということ。

〔問 13〕 次の選択肢のそれぞれの行為は、本文中で筆者が述べている「日本人の自然観」と「ヨーロッパ人の自然観」のどちらかがもとになっている。本文中で筆者が述べる「日本人の自然観」に当てはまるものを次の1～5のうちから一つ選んで記号で答えよ。

- 1 ダムを造ること。
- 2 石の家を建てること。
- 3 道路を舗装すること。
- 4 噴水を造ること。
- 5 山の中で隠棲すること。

〔問 14〕傍線部Ⅱ「これを、言葉の問題に引きつけて考えている」とはどういうことか。その内容の説明として最も適当なものを次の1～5のうちから一つ選んで記号で答えよ。

1 自然と人間との間を明瞭に分けずに、融け合おうとする日本人の生き方が、二千年という時を経てもなお受け継がれており、その生き方はヤマト言葉に「自然」という単語がないことに象徴されるのだということ。

2 自然と人間との間を明瞭に分けずに、融け合おうとする日本人の生き方が、二千年という時を経てもなお受け継がれており、その生き方はヤマト言葉に「申す」と「言う」にあたる観念の区別がないことに象徴されるのだということ。

3 自然と人間との間を明瞭に分けずに、融け合おうとする日本人の生き方が、二千年という時を経てもなお受け継がれており、その生き方は「アゲル」「クダサル」の区別ができなくなった大人が多くなったことに象徴されるのだということ。

4 ヨーロッパに倣って自然を変革し、人間の役に立つものにする日本人の生き方が、二千年という時を経てもなお受け継がれており、その生き方は自然は人間にとって素材であるという考え方に象徴されるのだということ。

5 ヨーロッパに倣って自然を変革し、人間の役に立つものにする日本人の生き方が、二千年という時を経てもなお受け継がれており、その生き方はとうとう地球から脱け出してその回りをめぐってしまう行動に象徴されるのだということ。

〔問 15〕本文の趣旨に合う説明として最も適当なものを次の1～5のうちから一つ選んで記号で答えよ。

1 日本人は、自然を、年をとってからの隠棲地として利用すべきと考えている。

2 日本人は、自然をうまく利用しているのに対して、ヨーロッパ人は保護すべき場所と考えている。

3 日本人は、自然を、自らと区別がなく共に生きるものと考えている。

4 日本人は、以前と比べると、ヨーロッパ人のように自然の利用の仕方が上手になった。

5 日本人は、自然と人間とを区別せず、言葉に惑わされずに生きるべきだと考えている。

